





特
門 へ 10
號 5194
卷 2



退閑雜記卷之二

去年 三月より ほど 本邦 鮎の 貝を 多く 求め
その あり けり ちと 人々 へ けり けり けり けり けり
鮎の ちと 穴を 昆布 へ けり けり けり けり 蓋を
その へ けり 浅草の 市 へ けり けり けり けり けり
その 市 へ けり けり けり けり けり けり けり けり
けり けり けり けり けり けり けり けり けり けり
けり けり けり けり けり けり けり けり けり けり
貝焼の 貝 へ けり けり けり けり けり けり けり けり

昭和三十年
一月十八日
購求

通りて日の半を家へあそび川うらむ川つらりりりり
まよよかの後志のよの月をすくすくくくくくくくく
まよよのののののののののののののののののののの
うりやうりふあふふふふふふふふふふふふふふふ
秋の春集しとさあくのめめめめめめめめめめめめめ
ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
あけくそやふくくくくくくくくくくくくくくくくく
人くくあふふり目くくく目くく目くく目くく目くく目
まき地れ便をのふく倍倍くくくくくくくくくくくく
あひくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

あけく手相うきよめも手相くくくくくくくくくくく
うきくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
勢くつれくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
まよよのののののののののののののののののののの
あふあふ人の道くくくくくくくくくくくくくくくく
りまきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまき
日のうらやうりくくくくくくくくくくくくくくくく
まよよのののののののののののののののののののの
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

よの町くさるに調度好むさめく流法をた
家持らちまかけ物けちる好く流るるい
江都の町くさるに杉質素まきくねいつら
さるいさるのかさるまきゆさるるに将基の
さるいさるあまのうに紙まきく盤まき
さるいさるるる江都の火災まきく
好まきにけ大部舎まきくひのやり好る火災まきく
く好いさる金銀の融通まきく兼雨殺るる好く
生の氣も催まきくといまきく知言也
かの存頼まきくと好まきくまきく胡粉まきくか

わの玉まきく共好まきくまきくまきく長崎の熊津まきく
いさる存頼まきく好まきく好粉の製衣まきくるる没
まきく存頼唐まきくまきく好粉まきく好粉まきく
熊津まきくまきく唐のまきく好まきく唐商まきく
かまきくおまきく好粉まきくまきく好粉まきく
まきくまきく存頼まきく好粉まきく好粉まきく
まきく唐のまきくおまきくまきく唐のまきく
まきくまきく好粉まきく好粉まきく好粉まきく
これ水や和まきく陶器まきく好粉まきく好粉まきく
まきくあまの唐のまきく好粉まきく好粉まきく

何事か... 墨の力... 紙の質...

薬方

墨は麻角... 交す... 紙を... 濡せ... 油紙... 桐板の製法...

志新... 桐板の製法... 白磷... 松脂... 交す...

リユクトホ... 巧思... 年... 製...

るはりあふさうなる里凡若川の物以て地の氣を
てまーういふに〜 理を誰〜 地
るは口鼻をみりし〜 地の氣を〜 水
物〜 水〜 水〜 水〜 水〜 水〜 水〜 水〜
却産つ〜 見〜 奇〜 奇〜 奇〜 奇〜 奇〜 奇〜 奇〜
て彼速朝朝臣朝朝臣〜 水〜 水〜 水〜 水〜 水〜 水〜 水〜
〜 精巧を〜 水中の魚を〜 呼吸す
物〜 水〜 水〜 水〜 水〜 水〜 水〜 水〜
器中へ水を〜 水〜 水〜 水〜 水〜 水〜 水〜 水〜
〜 水〜 水〜 水〜 水〜 水〜 水〜 水〜

忽ち魚氣を〜 氣〜 入る〜 忽ち遊
躍する〜 水〜 水〜 水〜 水〜 水〜 水〜 水〜
淡〜 水〜 水〜 水〜 水〜 水〜 水〜 水〜
〜 水〜 水〜 水〜 水〜 水〜 水〜 水〜
〜 水〜 水〜 水〜 水〜 水〜 水〜 水〜

大坂より前川巨舟と〜 水〜 水〜 水〜 水〜 水〜 水〜 水〜
紙より字文を〜 水〜 水〜 水〜 水〜 水〜 水〜 水〜
帳幕の書を〜 水〜 水〜 水〜 水〜 水〜 水〜 水〜
〜 水〜 水〜 水〜 水〜 水〜 水〜 水〜
〜 水〜 水〜 水〜 水〜 水〜 水〜 水〜

三月廿七日 鷲をかくしと云ふ并にシヨートル考ふ火の
鷲をかくし卵をかくしと云ふ一と云ふかきやまより
三十とせし過すを神官後孫と云ふ女に衣の衣を
付せしより深思ひつゝ一たることには深思
たりしより身三寸と云ふていふ事をもさし
衣の裾はさしより身三寸と云ふていふ事をもさし
深思ひつゝ一たることには深思ひつゝ一たることには
たるやと云ふ事より思ひかゝ思ひの事をもさし
身三寸と云ふ事より思ひつゝ一たることには

甲寅夏四月十日 細川多松の曾祖母清涼院死をこれ

たることより病より水種となりたり九日と云ふ事
齊茲朝臣 細川越中守
清涼院の御 を糸如の契に招れしより
朝より老女より身三寸と云ふていふ事をもさし
祝つゝ一たることより病より水種となりたり
齊茲朝臣 先細川少將
重盛朝臣 たることより病より水種となりたり
と云ふていふ事をもさし
朝臣より老女より身三寸と云ふていふ事をもさし
齡七十七ありしより病より水種となりたり

香清ののちのけいふる多き程を礎とすよあはる
をとりおし祝ひおさうとのわりの二ふをい齋茲
朝臣よおりのわひ思ふよりいさめくのたれ
つらいつらふも樂しきいさめくをひたれおあり
人をいぬはるしきいさめくありよるなり
くれを涙の初はよのせまるよりおあり
つらふをひたれよの常はつらふお合掌し
念佛ともいひつらふをさきしめひたれおあり
息の絶ゆ心もつらふをさきしめひたれおあり
かたうたさるもつらふをさきしめひたれおあり

ぬふほもつらふをさきしめひたれおあり
つらふをさきしめひたれおあり

茲直右師の様の七首の新歌の心を
影をうつりしよもあはる人のこひはあ
首をさきしめひたれおあり

つらふをさきしめひたれおあり
つらふをさきしめひたれおあり

歸退之夜歌静夜有清光
幸無恨志氣方自得樂哉何所憂所憂非吾
力いさめひたれおあり

安祥院殿の別當普門院わの宿坊東急院を
かへてく乞たうしあり尤儀よりまへさうり
高海とありとそひくすまらうりくはの匣の上
やちくゆえたのすかふておろしぬ

安祥院殿の清水中納言殿の生母まき様田の
あやうすま信をせぬひりたうり一ちわ新おを好
ひく月のツふれあしおよるれ時よつあつ
詠むいまふもかちうりまらり一寛政改元の
といたつまよらせぬひつぬよ遊芸一ぬ
ひりたうまよらせぬの葉に鳥ありとん

とのぬひりたうまを今まて世よまはるゆえのま
わらうりしひいしゆ一まをたへまらりまら
志うゆりげ子音のあおい先よ別院のま一所
点をたせぬよまらたに感一後ひく院よ
少筆をまめしれうりまらまらまらまら
まらまらまらまらまらまらまらまらまら
まらまらまらまらまらまらまらまらまら
おかし人ひめたきぬれをまらまらまらまら
院よひまらまら神信を守護する人のまら
乞うけく安樂口院のまの口院よ使し

いづれにやうく軍一振りしきちありぬのまは
あはれとて路の初段をわくある方の目とを
らるをわび思着門院下にあつてくおれを
そ名をまきし画れおれよあつてくおれを
しき人をおれをわびよひききくおれを
免ぬおれをいふまきもやおれのうれ
おれをわび思着門院下にあつてくおれを
よらありぬきしおれをわびよひききくおれを
れまよ感慨のわびしきもこれに法然とて位
とたつてくおれをわびよひききくおれを

とらありぬきしおれをわびよひききくおれを
れまよ感慨のわびしきもこれに法然とて位
とたつてくおれをわびよひききくおれを

中寺村の常在院にこれ流為の并基也爰よふた
てて孤りの陰縁起三巻あり予みか軍中
此の町画しきくおれをわびよひききくおれを
持するにせきしきくおれをわびよひききくおれを
されも又免つてくおれをわびよひききくおれを
初よひし永享年ふふおれをわびよひききくおれを
されも又免つてくおれをわびよひききくおれを

天竺謂姐嬉班足太

子成后よりいふ文あり、これより寺乃由志
るべき事あり、いふ川に、なほあり

志のふり、摺るふよ、法説まら、かなれ、
れ、志のふり、摺るふよ、法説まら、かなれ、
東鑑にも安達縮子足希婦細布二千端、
駿馬五千疋、白布三千端、信夫毛地摺子端

とむ川の志の産物なり、志のふり、
とあり、産物抄にも、志のふり、
のふり、志のふり、
とあり、志のふり、

れ、志のふり、
傳へる、志のふり、
丁未の年、乃、志のふり、

家、志のふり、
志のふり、
耳、志のふり、
志のふり、

戊申の年、れ、え、り

志のふり、
志のふり、
志のふり、

よき命をくれぬ身

四時海濱の代を池水れ言中れ月れ光ふれ
そのその道もわらわらぬ代もあふ望月のけ
とらふもみこたもみ川もわ

甲寅白川少く稽古舎の影を近くおれ
多秋ふらふくも山月もあふをきこもわ

秋田五歌

むしは鳥れ海にまのく小田の稲葉のくも
十右ねれ月をく結り

相ふありく光もくはれもあふをく月をく

十右ありくはれ月をく結り
代々の分はつるはれもくもく望月のけ
名ふく光もく白川の葉の月も秋も
くもくもくはれ月もあふをく月をく
あふもく秋もあふをく月をく
くもくもくはれ月もあふをく月をく
くもくもくはれ月もあふをく月をく

月小感一侍

くもくもくはれ月もあふをく月をく
葉のくもくはれ月もあふをく月をく
十右ありくはれ月もあふをく月をく

待月

高き山々を望みしむるもまた名もなき月夜に思ふ

山家月

あまのけしき代りて光の宗の戸もなき月のかおる家
奥州の塔靈の神にこそ此國もなきふらぬを
いふ人をやりてその神もまよふをせぬ例さう
うし大任のりてその神も無慮すれむといふ
うしけりていふ人もなきれし人をふらぬ
かの神もさうして世もなきれし月夜に思ふ
をねむるもいふ人もなきれし月夜に思ふ

うし兼月の千の山に地をこらてゆくもいふし
昔長つゆこらての谷文昆の田郎より時取し
れもかの邸の方夫もさう温帯よりゆめを
りてこれもさういふ人もなきれし月夜に思ふ
これいふ人の名もなきれし月夜に思ふ
いふ人もさういふ人もなきれし月夜に思ふ
えりて予此両方りてし制令のりていふ人も
さういふ人もさういふ人もなきれし月夜に思ふ
いふ人もさういふ人もなきれし月夜に思ふ
いふ人もさういふ人もなきれし月夜に思ふ
いふ人もさういふ人もなきれし月夜に思ふ

竹を煮つゝまきとの弁を取出し〜
油をぬ〜まき火をけ〜ため〜
〜水の〜
〜砥石をすりみ〜
〜粉を〜
青梅を煮〜

乙卯の元旦

鶴の梅の林〜
二首山歌〜

〜
〜

去年茶初〜
か〜

〜
〜
〜

茶入〜
〜
〜
〜
〜

餘り流れて川に似せぬものありて流るる所の
に流るるに色も味も似たりと云ふ人もある
はこれたゞの人の言を信じて代を代に
流るるに似たりと云ふ人もある

宇治川のその二つを名水と云ふは
昔より一神といふ言も
ありて是れを二つと云ふは
白川とありて清水堀井の水十数
ありて其の味も清水と云ふ
に似たりと云ふ言も
ありて是れを二つと云ふは

水はよもやまにありて
れ水も流るるに似たりと云ふ
言もありて是れを二つと云ふは
世原清水といふ言も
ありて是れを二つと云ふは
田の清水といふ言も
ありて是れを二つと云ふは

繪巻といふ言も
ありて是れを二つと云ふは
言もありて是れを二つと云ふは
言もありて是れを二つと云ふは

水色をみるに底ふあはるるをわしつたてぬれよき
葉をふるりたるをあらはるるに水干しとてはるる
され布に白き布とてはる

宇治の系末系末なり製すはるる茶の書用より古く
ふはるるをみるに製すはるる茶の書用より古く
のあはるるに焙炉をけりてはるるに
ふり葉に三つ出るとるの左右をとりて中にとりて
をよ葉とて地ふらるる枝に上品とてはるるに

大學衍義補臣案茶之名始見於王褒僮約而盛
著於陸羽茶經唐宋以來遂為人家日用一日不可

無之物然唐宋用茶皆為細末製為餅片臨用而
輾之唐盧仝詩所謂首潤月團宋范仲淹詩所謂
輾畔塵飛者是也元志猶有末茶之說今世惟閩
廣間用末茶而葉茶之用遍於中國而外夷亦然世
不復知有末茶矣とあるにこれよりては尚ほ
とてはるるに夏のれ殿をばはるるに殿のれ
周よりてはるるに王者のまはるるにこれより
のあはるるにはるるにのまはるるに尚ほはるる
俗よりてはるるにはるるにはるるにはるるに
はるるにはるるにはるるにはるるにはるるに

唐の樂の今ふさそせぬ人といふあかきいふふ
人形の形ごとく故程少くゆたそ故程整す法あり
別水や蒸入く火かけうそ水をすくわし
又こ水を入くうそ水をすくわしあつてく
そと度そ水も故程そまじつふそゆを
あつて湯もく火もあつてあつて
マニテイカとよみ接水はあつてあつて
陶器のうけ多敷をつくまそあつてあつて
のぶを交くつまゆふそあつてあつて
あつてあつてあつてあつて

夏に松煙もはく松細と松の葉とふり入
よくこもふしよくそをりそねそ龍蘇ふ
とそあつてあつてあつてあつて
あつてあつて

卯とよみまそ三存学校少あつて尚歯會を
ぬ七十以上の老人千人よの多敷席格よあつて
あつてあつてあつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつてあつて

我と文と二川の書を讀くゆの造のふふ入

唐衣の表紙少しすくすくみれ色いさそ梨の家と
水つりきりせぬーいさー明礬とすーいさ
うさふいささ

唐衣の表紙のまじりすくすくみれ色いさそ梨の家と
ふさふささ

